

Title	大島清著 大内兵衛・森戸辰男・久留間鮫造監修 高野岩三郎伝
Sub Title	Kiyoshi Oshima, Life of Iwasaburo Takano, edited by H. Ouchi, T. Morito and K. Kuruma, 1968 Tokyo
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1968
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.61, No.7 (1968. 7) ,p.830(114)- 834(118)
JaLC DOI	10.14991/001.19680701-0114
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19680701-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

大島 清著 大内兵衛・

森戸辰男・久留間鮫造監修

『高野岩三郎伝』

飯田 鼎

一般に、学者の生涯というものは波瀾の少ない単調な日々というのが普通である。稀には、マルクスやエンゲルスにみられるように、果て知れぬ激しい実践活動と闘争によって彩られる苦難の生活もなしとしないが、これはいわば例外であるといわなければならぬ。もちろん、今日の学者が、ひたすら象牙の塔にたてこもってよいかどうか、またかりに彼がそれを望んだとしても、そうすることを、客観的な諸状況が安易に許してくれるかどうか、それは大きな問題である。しかしともかく、学者の生活というものは、一般の市民の生活に比べるならば、現代のような実にあわただし時代でも、自分が一生の仕事とし、専門とするところのものに専心できるといふ喜びにひたることはできよう。まして第二次世界大戦前には、大学教授は、いわば特権的な存在として、現在のわれわれのよ

金井延教授の指導を受けたのである。

一方において、兄房太郎の影響もあって、日本の労働問題に深い関心を持ち、桑田熊蔵、山崎覚次郎、小野塚喜平次らと会合して、日本社会政策学会の創設に参画し、鉄工組合、労働組合期成会にも兄とともに力をつくす一方、専攻を統計学と定めて、あらためて統計学的方法をもってする労働問題の研究に没頭するという、きわめて実証的な態度をもって、学生生活をはじめることとなった。しかしながら、高野岩三郎のそれ以後の生活は、たんに一学究としてのそれではなく、研究者であるとともに調査マン、大学教授であるとともにすぐれた大学経営者、冷静な理論の人であるとともに誠実な実践家という、まことに多彩にして多忙な生活であったといえるであろう。われわれはこの書をよみ終って、彼の真理にたいしてあくまでも忠実であろうとする学究的精神とともに、誰人に接するにも謙虚、公平且つ寛大で、苦難はみずから真先に負うという求道者の精神の発露を見出すことができる。かつて大内兵衛教授は、恩師高野を評して「一国を興す人」といっておられるが、筆者は、孟子の言葉を引用して、「天下の愛に先立ちて愛え、天下の楽におくれば楽む」の人といたいと思う。

七九年におよぶ彼の生涯の事業のなかで、なしとげられたことは多いが、そのもっとも重要なものをあげるならば、まず第一に、経済学の国家学からの独立、すなわち東大経済学部の法学部からの分離独立、第二に統計学のが国への移入と、統計学的方法による労働者の家計調査、第三に労働問題への関心と労働運動への参加、第

うに、学問以外の雑用に追いまわされることなく、学問と教育に専念できた想像し、羨望の念をおこすことも無理ではない。しかし、実はこのような見解は、皮相な上だけの考え方であり、戦前における学問研究にたいする国家権力の圧力、絶対主義的天皇制および軍国主義的フアシズムの暴圧が、いかに荒々しく且つ無慈悲に、自由な思想を抑圧し、破滅的な侵略戦争をひきおこすに至ったかを憶うとき、われわれは、そこで、このような狂暴な嵐のなかで、その非道な圧迫と弾圧に耐え、学問研究の自由を最後まで擁護した人々の上に想いを馳せないわけにはいかない。そのような人々のなかには、たとえば反体制的、すなわち社会主義的な思想をもつた人が数多く含まれていることは当然であるが、しかしそれとらんで、きわめて少数ではあるが、いわば徹底的にヒューマンな立場を堅持して闘った人々がいることを忘れてはならない。高野岩三郎こそまさにそのような人であったことを、この著作はわれわれに訴えてやまない。

二

高野岩三郎は、明治労働運動の先駆者である高野房太郎の実弟として、明治四年（一八七一年）、長崎に生まれた。のち生家は、一家をあげて、東京に移ったが、没落、つづいて肉親の死により苦難に立ち至ったが、アメリカでの兄房太郎の労働生活による送金に支えられて、岩三郎は明治二八年、東京帝国大学を卒業、大学院に籍をおき、「労働問題を中心とする工業経済学」を専攻のテーマとして、

四に大原社会問題研究所の建設と経営、そして最後に、晩年、第二次大戦後の日本の民主化過程における活躍の五つの事業をあげることができよう。

これらの業績について、いまここで事新しくのべる必要はないが、そのどれをとってみても、それらは相互に関連した問題であり、一体として論じられなければならない問題であるので、つぎの三つに大別して、高野の人物と業績について考察を加えたいと思う。すなわち、(一)東京大学教授としての役割と業績、(二)東大をやめてのち、民間の研究者および研究機関の主宰者としての活動、(三)労働運動・無産階級運動および労働者階級の啓蒙運動における積極的な協力者としての一貫した態度である。第一の時期は、わが国が、第一次大戦後の大正デモクラシーの時機に際して、社会科学の研究が盛んとなり、国権的保守的学風の東京帝大に経済学部を新設するための努力がつけられ、高野のもとに、榎田民蔵、権田保之助、森戸辰男、大内兵衛、細川嘉六等の有能で新進気鋭の若い学徒が集まったのであって、これらの人々が、のちに大原社会問題研究所の建設にあたって、きわめて重要な役割を演じたのである。若くしてすでにこのような人脈を形成しえたことは、高野の人的魅力と学問的感化の然らしめるところであつたろうが、その本質をなしているものは、事に臨んで徹底的にやりぬくという辛抱強さとひたむきな心、これが若い学徒の心を打ったにちがいない。東大経済学部の独立は、高野の学者的良心をかけての、東大教授としての職を賭しての事業であり、これによって彼は、東大経済学部における

中心的存在として重きをなすこととなった。

ところが、この創設後間もない経済学部は、国際労働代表事件に
関連して、高野を失わなければならない悲劇に遭遇したのであつ
て、思うに、高野が東大教授を辞したことは、二つの意味で重要な
結果をもたらした。ひとつは、東大経済学部における中心的存在が
失われ、その後の学部行政の困難さとなり、内部の人事面での
調和が破壊され、国家権力の外からの圧迫への抵抗を弱め、その結
果としてそれを一層複雑にすることとなったのである。しかしその
ような反面、高野は、大原社会問題研究所に全力を投球するよう
なり、わが国における社会科学の研究が、民間において独自に逞し
くつづけられる基礎を築いたことは特筆されなければならない。著
者のいわゆる「人生の転機」となった国際労働代表事件についてい
えば、彼が、国際労働代表をひきうけさせられるに至った経緯はま
ことに奇妙であるが、これは実に高野個人の問題であるのみなら
ず、日本資本主義の矛盾、独占資本主義成立期におけるそのもつと
も弱い側面であるところの問題と密接に関連するところに重要性が
存在する。すなわち、一九一九年(大正八年)ヴェルサイユで調印さ
れた対ドイツ講和条約のなかに、加盟国は、賃労働者の労働条件の
改善を重視し、労働組合結成の権利、八時間労働制、幼年労働の禁
止など九項目を含み、その目的達成のために、国際労働事務局(I
L.O.)を設置することを示唆していたが(一四八―九頁参照)、この
日本代表として、資本家側は、八時間労働制と女工の深夜業禁止絶
対反対の立場を主張するところの、綿紡績資本家、鐘紡社長武藤山

活をおくりながら、他方、自分が去ったのちの東大経済学部の次第
に深まってく内部矛盾に心を痛めた。この「冬の時代」における
高野の業績として忘れることのできないのは、統計学古典選集の刊
行であつて、これは今日もなお、古典的価値をもっている。

戦後、高野は、新憲法の制定を強い関心をもち、みずから提唱し
て憲法研究会をつくり、草案の起草および審議をおしすすめること
によって、政府の旧憲法を維持しようとする保守的な態度に
対抗した。そしてついに、根本原則を、「天皇制ヲ廃止シ、之ニ代
ヘテ大統領ヲ元首トスル共和制採用」とし、北米合衆国憲法、ソウ
イエット連邦憲法、瑞西連邦憲法、独逸ワイマール憲法を参考とし
て、日本共和国憲法私案要綱を作成し、発表した。これをみると、
彼がいかに日本の反動化をおそれ、とくに天皇制と反動勢力の結び
つきに警戒の念をもっていたかがわかる。とくに、この草案に比較
すれば、戦時中、進歩的といわれた美濃部達吉の憲法論の如きは全
く問題とならず、現在の憲法に優るとも劣らぬところのものであ
り、これに多くの影響を与えているのではないかと思われるのであ
る。このことをもつても、現在の憲法は、たんに外国の占領者
からおしつけられたものではなく、日本の民主的勢力の思想を反映
したものであるということができよう。

内容豊かな本書について書くべきことは多く、とてもこの小論で
はつくすことはできないが、とくに「第三章人間・高野岩三郎」は
読む人の心を特に強く打つ。小野塚喜平次と矢作栄蔵をして福田徳
三のような良き友に恵まれたこととその周囲にすぐれた人々を友

治をおくることとし、労働者代表については、政府は、労働組合を
法認していない建前から、あらかじめ友愛会や信友会に相談するこ
となく、府県知事に命じて、工場、鉱山等より協議員を選ばせ、こ
れに主要労働団体より一名ずつの代表を加えて労働代表選定協議員
会をつくつたのであつて、労働組合の存在を全く無視した官製協議
会であつた(一一五頁)。このような労働代表選定方法にたいして、
友愛会をはじめ労働組合が絶対反対であつたことはいうまでもな
い。高野は、悪意ではなく全くの善意から、労働団体の意向を充分
に確かめることなく、政府の要請に応じて労働者代表をひきうけた
ことに彼の甘さがあつた。この事件によって、高野は、責任をとつ
て東大教授の職を辞するのであるが、それを契機として彼は、大原
社会問題研究所の経営に全力を傾ける結果となつた。

「第四部 大原社会問題研究所の経営」は、本書のなかでも、もつ
とも充実したすぐれた部分をなしている。著者の高野にたいする尊
敬の心がよくにじみ出ている玩味すべき文章であると思う。二人の
偉大な個性、高野岩三郎と大原孫三郎との出会い、わたくしはこの
二人の友情に、非凡なまたきわめて美しいものを感じる。しかし
大原社会問題研究所の経営に専念しはじめた一九二二年(大正一〇
年)以後、関東大震災、日本共産党の弾圧、世界大恐慌、満洲事
変、日華戦争そして太平洋戦争と、ファシズムと軍国主義の破壊の
途を歩むのであるが、この悲劇的な歴史のなかで、高野は、「大原
社会問題研究所雑誌」の発刊、欧露の旅、マルクス全集の計画、大
阪労働学校の経営、無産政党運動への積極的な助言などの多忙の生

人、門下および知己としてもつことができたという事実は一般の学
者の生涯に比べるならば、必ずしも平穩ではなく、むしろ波瀾に富
み、不幸の源とも考えられるような事態に立ち至つたにもかかわら
ず、逆に彼を平穩と幸福に導くものとなつたのである。それは、ひ
とえに彼の人柄であつた。大内兵衛教授に与えられた色紙には Die
Wahrheit ist das Leben des Forschers 「真理ハ研究者ノ生命ナリ」
というドイツ語のわきに「理下情」と書かれてあつたという(四二
八頁)。まことに味わうべき言葉ではないか。また著者は、つぎのよ
うにのべている。「高野岩三郎の気質は内向的で、つねに平靜を
持した。兄の房太郎が陽気で開放的であつたのと対照的である。
生来の庶民の子である彼は、肩をはり構える格好の人物をきらつ
た。学者でも、福田のように、時にはハメをはずして酒間裸でおど
り出し、かつ談論する人とは気が合つた」(四二六頁)。また、「民
衆の中に生活し、民衆とともに向上発展する」ことが彼の終生の念
願であつた。帝国大学勲任教授の權威を誇示するなどもつてのほ
か、身辺を飾ることは何ひとつせず、公の儀式に必要な大礼服をつ
くることもしなかつた。華ばなしい松舞台に立つことは避けなが
ら、コッソツと地道に、為すべきことは確実に為す、というおもむ
きがあつた。事に當つて責任を回避するという逃げ腰ではなく、黒
幕的存在として裏から人をあやつるという姿勢でもなかつた」(四
二九頁)。これによってみるに、高野岩三郎は、理を内に包んだ情の
人であつた。包容力のあるしかも同時に、責任感の旺盛な人柄であ
つたということは、われわれ研究者にとつてもっとも学ぶべきこと

ろであろう。しかしそれに加えて、わたくしは、高野のような人こそ、正しい意味での政治性を身につけ、それと学者としての誠実さと結びつけたのだといいたい。「こういう人にわたしはなりたいたい」という感慨を、この伝記を読むことによって覚えさせられる。その意味で、本書は、すぐれた個性をもつ研究者の伝記であり、たんに伝記として優れているばかりでなく、日本の社会経済思想史の一断面をも物語る傑作ともいえよう。（岩波書店・一九六八年三月刊・B6・五〇三頁・八五〇円）

〈追記〉 この書評の初校がでたころ、「エコノミスト」六月一日号に、山辺健太郎氏の書評がでたが、これはまことに意味深いものといえよう。批判の要点は、この書は、「世間によくある『社史』の編さんによく似ており、批判的見地が欠けているという点である。その例として山辺氏は、日華戦争以後の高野の侵略戦争にたいする態度をあげ、本書には、日本が中国への侵略を強めた時代における高野のことについて、都合の悪いことはまったく書かれていない」とはげしく非難しておられる。筆者は、そのような事実についてはくわしく知らないのであるが、しかしこの書評によって、やはり衝撃をうけ示唆されるところが多かった。このようなはげしい態度で批判しうるのは、共産党員として一貫された山辺氏のいわば当然の権利であろう。しかし、この書をよむ場合、戦前の自由主義者の「限界」というものを意識してよむことは必要ではなからうか。